

5.

日本は、ご存知のように、寒帯でもなく熱帯でもなく温帯に属しますが、それもただ単調な温帯ではありません。南からは暖流が流れ、北方からは寒流がきて、北から南につらなる細い島には、熱帯的、寒帯的の二つの要素がこまやかに入り混じっています。京都に比叡山という山がありますが、この山に集まる小鳥の種類の多いことは有名でしょう。なぜ、そんなに多様な種類の小鳥が集まるかというと、ちょうど寒い国の条件と暑い国の条件とが、ここで重なっているからです。この比叡山の小鳥のように、日本全体も南からきた人たち、その文化や感覚と、北からきた人たち、その文化や感覚が複雑多様に混じりあつて一つのものとなつていくのです。

はじめて日本にやってくると、こまやかな変化に富んだ島、海岸、山、樹、川などの自然の風景がきつと印象的であると思います。それは、大陸のような一本調子の大きく強烈な風景のかわりに、变化的であり複雑微妙でありながら、全体としては温和な統一をもった優しい印象があるはずです。しかし、その温和さはただ平板な温和さでなく、寒さと暑さの二重性をふくみ、大雪と大雨をふくみ、熱帯の様相と寒帯の様相の複雑微妙な調和を保っているのです。夏には熱帯系の稲が生えると同時に、冬には寒帯系の麦が生えます。本来は熱帯の植物である竹は、日本の各地に繁茂して美しい竹林をなしていますが、その竹に寒帯系の象徴である雪がつもつてしまふありさまは、日本の状況を実によく表しています。竹の弾力的な美しい曲線や雪が落ちるとビーンと揺れもどす柔軟な強靱さは、日本の文化や美術がもっている多様な変化性と調和性、弾力性と均衡性の妙味をまざまざと示すもののようです。

しかも、この変化に富む土地の上に、モンスーンが吹いて、四季の変化がリズムミカルにめぐってきます。ここに春のうららかなさ、夏の明るさ、秋のさわやかさ、冬のきびしさが調和的に生じてきます。日本美術にふくまれる一種流動的な調和感、機知に富む装飾感、リズムミカルな構成感などは、この風土なしには考えられません。

また、この温和で変化に富む自然は、日本人の対自然感情をこの上なく親和的なものとし、こまやかな優しいものとし、自然こそ日

本人の故里という情的な関係の濃いものとなりました。日本の芸術は、自然を冷たく突き放して知的に考察したり、解体したり、組み立てたりはしなかったのです。日本人は、自然の外からこれを変形したり利用したりするよりも、微妙で優しい自然のふところに抱かれて、その中に溶けこんで微妙に協同することを得意としています。日本芸術の中に、いかに自然と親和的に交流して成り立っているものが多いか、建築でも庭園でも、さらには絵画でも、文学でも、名作といわれるものはすべて自然の中に深く入りこんで、そこに抱かれた境地で自然の力と自己の力を微妙に重ねながら創作されています。

ですから、日本芸術には根本において優しい情的な性格が濃厚にひそむのです。明徹な知性や強靱な意志などよりも、いきいきとした優美で中和的な感情にすぐれているのは、当然といえましょう。複雑多様な变化的なものを柔らかに単純なものにまとめあげ、そこに機知的でリズムミカルで装飾的な調和をつくり出すこと、ここに日本人の生活と思想が成立し、またその特色ある美術が育てられてきました。大陸から次々と入ってきた諸様式も、すべてこの体制の中に溶かされて、形は似ていながらも、内容は全く日本的なものと化されて多彩な芸術の流れを生んだのです。

(河北倫明「日本美術入門」)



渡り鳥は、果たして生まれながらにして渡りの時期と渡りの方向とを知っているのか、それともベテラン古老に何度か導かれて学習するのか。後者ではありえないのではないかと例はいくつかある。

たとえば、ホトトギスの親は五月ころ日本に渡って来て、自分では巢も作らず、自分の卵とよく似たチヨコレート色の卵を産むウグイスの卵を見つけ、親鳥のちよつとのすきをねらって卵を産みつける。

帰ってきたウグイスの親は、少し大きい新米の卵にも気づかず熱心に抱卵する。やがて孵化したホトトギスのひなは、こだわりもなくウグイスのひなを蹴おとして、ウグイスの親の愛を独占して育つ。しかし、秋が近づきウグイスの親が近くの山へ帰るころ、ホトトギスのひなは何千キロの南国へと旅立つのである。

まだある。渡り鳥を籠で飼育していると、秋の渡りのころになると、「渡りのいらだち」とか「渡りの興奮」とかいわれる状態が現れる。天空以外、あたりの事物はいっさい見えない条件の下でも、その土地で育ったその鳥は定まった方向を向いて羽ばたくことを繰り返す。その方向は、その土地でその種の鳥が秋に渡る方向にまさに一致する。そして、そのいらだちは、ほぼその種の鳥が越冬地にたどりつく日数だけ続いて静まるのである。

このことはしかし、もっと疑いのない実験によつて確かめなくてはならない。それを確かめるために、繁殖地で、ある種の渡り鳥の卵なりひななりをとり、これを東または西の方向に数百キロも移動して育てる。南北に長く、東西に細い日本ではちよつとやりにくい実験であるが、ドイツなどには、はるか国境を越えて西の方へ運んで実験したという例がいくつかある。秋になり、渡りの時期を迎えた時、このように本来の繁殖地から遠く、東や西に移動されている若鳥は、どの方向に飛ぶかを足輪をつけて確かめようというわけである。この場合、移動された先に同種の鳥が全然繁殖していない場合には簡単であるが、移動先にもそのへんに渡って繁殖している同種の仲間がいる場合には、渡りの時期になつて、その土地の同種の仲間が全部旅立ってしまうのを見極めて、その後に移動して育てた若鳥を飛び立たす必要がある。そうでないと、そのあた

りの同種の鳥の先達の経験者の仲間に加わり、誘導されて飛んだのではないかという疑いが残るからである。

このような実験はいろいろの種について、いろいろの場所で行われたのであるが、その結果はいずれも、移動された若鳥は、移動される前の場所、つまり、親が営巣した本来の繁殖地からの渡りの方向、それは代々その土地で営巣するその種の鳥が毎年繰り返している渡りの方向であるが、その方向に向かつて、数百キロ移動されたことは知らぬかのように飛ぶということである。図で明らかなごとく、AからA'に移動された若鳥は、Aでの渡りの方向A-Cに平行に同じ距離を飛ぶことになるのでA'-Cとなり、その種族の越冬地Cからは数百キロもずれたC'に行つて越冬することになる。そしておもしろいことには、A'に営巣する同種に属する種族がたとえばA'-Cの渡りをするすると、今移動された若鳥は、もしその土地に営巣する種族が渡りの旅に勢ぞろいするころ放されると、その土地の同種の仲間の地勢に従つてA'-Cに同調してしまふ傾向がある。しかし、その土地の種族の旅立ちが全く終わつたところに放すと、かたくなに遺伝的に伝えられたA-Cの方向を守つてA'-C'を飛んでしまふのである。

この種の実験を卵やひなでなく、渡りの途中のものをBで多数捕らえてB'に運び、足輪をつけて放すやり方でやつてみても、B'-C'でなくやはりB'-C'を飛ぶ。どうもA地点に営巣するこの種の種族には、A-C方向に飛ぶという至上命令が種族の遺伝として生まれながらに伝えられているとしか考えられない結果である。要するに、少なくともその年生まれ若鳥は、とかくその土地での、同種の仲間の渡りの方向に誘導され、同調し易いのであるが、それとは別に、遺伝的に伝来の渡りの方向の指示を与えられているということは注目値することである。

(桑原万寿太郎「帰巢本能」)



「ウサギの耳はなぜ長い。カヤの実、シイの実食べたから。」
こんな歌を子どものころ、聞いたことがある。絵本には、長い耳を後ろに倒し、フルスピードで走っているウサギが描かれていたのを覚えてる。

耳がひっかかるようなヤブなどをくぐり抜けるときは別として、広い原っぱなどを走るときには、ウサギはびんと耳を上の方に立てているのが本当である。耳を後ろに倒していた方が絵としては、走っている姿としていいかもしれないし、耳に当たる空気の抵抗も少なく、スピードも出るわけである。

なぜ耳をたてて走るかというと、ウサギにとつては、あの長い大きい耳に風をできるだけたくさん当てて走る必要があるのだ。

人間でも、ウマでも、けんめいに走ると汗をかく。暑い季節ではなおさらである。この汗が蒸発することによって体熱を奪い、体を冷やすことは、ご存知のとおりである。普通、一グラムの水の温度を一度上昇させるために必要な熱量は一カロリーであるが、一ccの汗を蒸発させるためには約五四〇カロリーを要する。

ウサギには汗せんが絶対にない、というわけではないが、汗せんの機能が悪く、昔からウサギは汗をかかない動物といわれていた。

キツネなどに追いかけられると、ノウサギは時速七〇キロ以上のスピードで逃げるから、体内で急激に発生した熱は、血液によって風当たりの良い長い耳に運ばれて冷やされる。このためには、耳を後ろに倒していたのでは冷却の効果が上がらないので、やはり風当たりを良くするためには、びんと上に立てて走らなければならないのである。

オートバイのエンジンには、ギザギザがあって、空気に当たる面積を広くしている。これと同じようにウサギの耳は空冷式の大切な器官であるから、長くて大きくなっている。

ちなみに、ノウサギの体表面積に占める耳の表面積の割合は、獣の中で最も大きく、最も効率のよい空冷装置をもっているのである。私たちでも、うっかり熱い物に触れ、指先をやけどしそうになると、あわててその指先を自分の耳にもつけていく。人間でも、耳は空気に触れる表面積が大きいので、いつも冷たいからである。

ウサギの仲間はナキウサギ科とウサギ科の二つに分けられる。ナキウサギは、わが国では北海道の大雪山にみられ、ヒマラヤから北方に分布し、一四種類に分類される。ウサギ科はアフリカ、ヨーロッパ、アジア、アメリカなどに分布し、五二種類ある。

われわれ人類の祖先はサル仲間であり、サルの祖先はモグラの仲間である。このような哺乳類が地球上に初めて現れたころは、竜のような大きなトカゲが地上をわがもの顔に横行していたから、体の小さい哺乳類の祖先は地下にもぐってつつましく暮らしていた。モグラの仲間からネズミに進化したのは約一億年前といわれている。ウサギの祖先もネズミに近い間柄であるから、はじめはモグラのように地下にすんでいた。今日でも進化の遅れているウサギの仲間は必ず地下、岩穴などに巣を作る。

(林壽朗「ウサギ 大きな耳は効率のよい空冷装置」)



杉野君は、洋反物株式会社梶万商店の反物を、遠く地方の呉服店に卸し歩く出張員になったばかりの青年である。初めての出張は出足からうまくゆかず、さんざんな売り上げであった。そして、きょうの目的地はG町――。この旅の最後の日程である。

G町に着いたころはもう一尺先も見えぬ吹雪であった。鈴をつけた馬、がたがたの箱馬車、雪止めの新しい筵、そんなものが雑然と並んでいる駅前で、杉野君はぼう然と立ちつくしてしまった。土地の人々は自然に柔順な人たちのみの持つ敬虔さで、ただ黙々と動いていた。

杉野君はまるで吹雪に吹きこまれた人間のように、近江呉服店へ転がりこんだ。店には誰もいず、黒々と古風にくすんだ店構えがしんと静まりかえっていた。囲炉裡に火が赤々と燃え、鉄瓶からは白い湯気が暖かそうに立っていた。杉野君は雪を払いながら、何かほつと安堵した気持ちになっていった。ふと顔を上げると、奥の帳場に一人の少女が手に雑誌を持ったままこちらを向いてほえんでいた。えくぼが白い花のように美しかった。

「あの、東京の梶万でございますが。」

杉野君ははつとしてお辞儀をした。少女も学校でするように丁寧に頭を下げると、そのままはたばた奥の方へ走って行った。裾の短い着物の下にすつくりと伸びた白い脚、そうしておさげに結んだ赤いりぼんが、蝶々のように奥へ飛んで行った後を、杉野君は夢のようにじつと見送っていた。

「ほうほう。それははあ。」

そこへ主人がそう言いながら、煙草盆を提げて出てきた。

「ひどい雪ではあ。さあ寒い時は火のそばがいちばんす。」と、炉辺にすわりながら、煙管で煙草を吸うのだった。杉野君も挨拶をしてすわった。

「こうぞ、こうぞ。」

主人は突然大声で小僧を呼び、

「座布団こさ持ってこ。」と命じるのだった。杉野君は囲炉裡にこ

ころもち手をさしだしながら、まぶたのなぜか熱くなるのを覚えた。「ここへは初めてだべ。この雪こはあ驚きなすつただべのう。」

「何もかも初めてでして。」

杉野君は訴えるように、種々の思いをこめてそう言った。

「ほうほう。よく来なすつた。」

そこへ先刻の少女がにこにこ笑いながら、お茶を持ってきた。

「これが娘つ子ではあ、道ちや、お辞儀はあしなすつたべのう。」

少女はくくつと笑ったまま、またばたばたと奥へ走って行つてしまった。白い額、黒々としたつぶらな瞳、そうしてまた白い花のようなくぼだった。杉野君は自分までが何かにこにこ今心楽しかった。

「ひとつうんどやってください。」と元氣よく言い、例のようにまずモスの見本を開いた。

「ほう。この朱はあよくできたつす。」

主人は見本を手にすると、いきなりさも感じ入ったように呟いた。

（外村繁「鶉の物語」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

あの荒地へ水を引く法があるのかと、城へ帰ってから昌治がきいた。およそ三十年ほど前に、その案を申請した者がおります、と小三郎は答えた。井関川の上流から特殊な方法で堰を掘ると、荒地へ水を引くことができる。その方法を図面にして申請した書類が、いまでもわが家の蔵書の中に残っている、と小三郎は熱心に付け加えた。

「いまの老臣どもはそれを知っているのか」

「わかりません」と小三郎は口ごもった。「滝沢御城代は知っておりますが、どうやら御内福と評判の藩としては、このうえ物成りを殖やして、幕府にいらまされることをおそれているのではないかと、というような評を聞いたことがあります」

「一度その図面を見よう」昌治はそういつて小三郎の眼を見つめた、

「――明日は剣術の相手を申し付けろぞ」

「こんなことを申し上げてはお怒りを受けるかもしれません」

小三郎はよく思案しながらいった、「あまり一人の人間をごひいきあそばしては、家中へのしめしがつかなくなるのではございませんか」

「おまえは滝沢の倅のことをいつているのか」

「誰とは限りませんが、わたくしはもう三十余日も、お忍びのお供をしております、これでは家中の噂にならずにはいません」

「噂になつては悪いか」

「お側小姓は五人、ほかの者にもお目をかけていただきたいのです」

「よし、聞いておこう」昌治はいった、「だがおれは、おれの好きなようにする、ということも覚えておけ」

小三郎は低頭してさがった。

昌治は四月に初入国をしてからまもなく、忍び姿で城の搦手をぬけどし、小三郎だけを供に領内を見てまわった。それ以来三十余

日、雨風にかかわらず、その見回りは休まずに続けられた。初めのころ、小三郎は自分のしらべた領内踏査の帳面を見せた。昌治はあまり興味をそそられたようすはなかった。小三郎だけを供にするようになったのはそのあとのことだが、踏査帳を見せろとは二度といわなかった。この忍びの巡視は嚴重な秘密にされていたが、藩主がこのように出あるれば噂にならずにはいない、まして供はまだ十五歳の小三郎ひとりである。口に出してこそなにもいわないが、自分を見る人たちの白い眼がしだいに露骨になつてきたことを、小三郎は敏感に気づいていた。

そして梅雨にはいったある日、彼が勤めを終わって下城してくると、材木倉のところで十人ばかりの少年たちに取り囲まれた。としては十五、六から十七、八どまり、みな従士組の子たちで、ほとんど知っている顔だった。

「ちよつと聞きたいことがある」と今原修平という少年がいった。

「裏の原まで来てもらおうか」

小三郎は彼らが、みな木剣を持っているのを見てとり、なんの用かときき返しながら、いつかのときと同じだな、と思つた。「原へいつてからわけは話す」と今原は怒つたような声でいった。「ここでは邪魔がはいる、あるけよ」

彼らは四方をかためた。小三郎はおとなしくあるきだした。まえには尚功館、目見え以上の子弟だったが、こんどは父の組下の徒士の子たちだ、上からも嫌われ、下からもそねまれている。父のいったことは事実だったんだなど、あるきながら小三郎は思つた。けれど、おれはへこたれもしない、力以上の無理押しもしないぞと。――雨はやんでいたが、原の雑草は濡れているので、小三郎ははじめ彼らの袴も、裾のほうはずっくり濡れてしまった。

（山本周五郎「長い坂」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

君たちの船は悪鬼に逐い迫られたようにおびえながら、懸命に東北へと舵を取る。磁石のような陸地の吸引力からようよう自由になることのできた船は、また揺れ動く波の山と戦わねばならぬ。

それでも岩内の港が波の間に隠れたり見えたりし始めると、漁夫たちの力は急に五倍にも十倍にもなった。岸から打ち上げる目標の烽火が紫だつて暗黒な空の中でぱつと弾けると、さんさんとして火花を散らしながら闇の中に消えていく。それを目がけて漁夫たちは有る限りの艀を黙ったままでひた漕ぎに漕いだ。その不思議な沈黙が、互いに呼び交わす叫び声よりもかえって力強く人々の胸に響いた。

船が波の上に乗った時には、波打ちぎわに集まって何か騒ぎたてている群衆が見やられるまでになった。やがて嵐の間にも大砲のような音が聞こえてきた。と思うと救助艀が空をかける蛇のように曲がりくねりながら、船から二、三段へだたつた水の中にざぶりと落ちた。漁夫たちはその方へ船を向けようとひしめいた。第二の爆声が聞こえた。縄はあやまたず船に届いた。

二、三人の漁夫がよろけ転びながらその艀の方へかけ寄つた。音は聞こえずに烽火の火花は間を置いて怪火のようにはるか空にぱつと咲いてすぐ散つていく。

船は縄に引かれてぐんぐん陸の方へ近寄つて行く。水底が浅くなつたために無二無三に乱れたち騒ぐ波濤の中を、互いにしつかりしがみ合つた二艘の船は、半分がた水の中を潜りながら、半死のありさまで進んでいった。

君ははじめて気がついたように年老いた君の父上の方をふりかえつてみた。父上は膝から下を水に浸して舵座にすわつたまま、じつと君を見つめていた。今まで絶えず君と君の兄上とを見つめていたのだ。そう思うと君はなんともいえない骨肉の愛着にきびしく捕らえられてしまつた。君の眼には不覚にも熱い涙が浮かんできた。君の父上はそれを見た。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「あなたが助かつてよござんした。」
「お前が助かつてよかった。」

兩人の眼はとつさの間にも互いに親しみをこめてこう言い合つた。そしてこの嬉しい言葉を語る眼から互い互いの眼は離れようとしなかつた。そうしたままでしばらく過ぎた。
君は満足しきつてまた働き始めた。もう眼の前には岩内の町が、君にとつてはなつかしい岩内の町が、新しく生まれ出たままのように立ちつらなつていた。水難救助会の制服を着た人たちが、右往左往にかけめぐるありさまもさまざまと眼に映つた。

なんともいえない勇ましい新しい力——上潮のように、腹のどん底からむらむらとわき出してくる新しい力を感じて、君は「さあ来い。」と言わんばかりに、艀をひしげるほど押しつかんだ。そして矢声をかけながら漕ぎ始めた。涙があとからあとから君の頬を伝わって流れた。

今まで黙っていたほかの漁夫たちの口からも、やにわに勇ましいかけ声があふれ出て君の声に応じた。艀は梭のように波を切り破つて激しく働いた。
岸の人たちが呼びおこす声が君たちの耳にも入るまでになった。と思うと君はだんだん夢の中に引きこまれるようなぼんやりした感じにおそわれてきた。

君はもう一度君の父上の方を見た。父上は舵座にすわっている。しかしその姿は前のように君になんらの迫つた感じをひき起こさなかつた。

やがて、船底にじやりじやりと砂の触れる音が伝わった。船はとどこおりなく君が生まれ君が育てられたその土の上に引き上げられた。

「死にはしなかつたぞ。」
と君は思った。同時に君の眼の前はみるみる真つ暗になった。……君はその後を知らない。

(有島武郎「生まれ出づる悩み」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

歌枕——、それは古来、多くの歌人によつて和歌に詠じられてきた名所である。

たとえば須磨、たとえば逢坂……。しかし、現代ではもはや、それは心ときめくあこがれの地などではなくなつてしまつた。

文明の発達は、大きかつた地球をいだいに小さくしてしまつたといつた人があつたが、そうした現象は、この小さな日本という島国において、いつそう無惨に進行した。いま、名所、旧跡、景勝のたぐいは行楽の地となり、その連想として脳裏に思い浮かべるものは、散乱する紙屑や塵芥の放つ悪臭、ジュースのあき缶、人ごみと疲労感と、腹だたしいむなしさ等々である。

いわば勝地歌枕とは、まさに名実ともに減びきつて、現代にはあとかたもない非在の場所であるのだ。

にもかかわらず、いや、それゆえにといつた方がよいかもしれない。私はこのごろしきりに歌枕への旅という郷愁にかられる。一枚の地図を広げて、自在に指にたどり、目に追うその非在の地は、いまなお白砂青松、山紫水明、あきあきするくらい年月を降り積もらせて、ふしぎなはずけさともにある。そして、かの惨憺たる現実と直面しないかぎりには、その甘美な、美的連想をよび起こす快い韻きをもつた地名を舌頭にころがすままに、それはなつかしい心のふるさととしての叙情をよみがえらせ、まるでみずやかな思想のようにたちあらわれる。

この、ふしぎな絆に結ばれたまま、累年の親愛とともにある非在の地への郷愁は、あるいはかつて、「居ながらにして名所を知る」と、詩心を誘つた歌の心そのものへの郷愁なのかもしれない。旅行をする機会はきわめて多いが、なぜかそれは「旅行」という、どこか事務的な日程に追われた時間であつて、「旅」という味わいにみたされることが少なくなつてしまつた。そうした旅の味わいが何に

さまたげられているのかを考えてみると、点から点への過程が含まれていないわけではないが、その過程はきわめてすみやかで、そこにはただあわただしい移動の心と目が、人という主体をは

なれ、目的地への短絡のみを求めているようだ。

「くたびれて宿かるころや藤の花」と詠じたのは松尾芭蕉であつたが、この「くたびれて宿かる」という行程によつてはじめて、旅中の

「藤の花」はいきいきとした表情をもつて問いかけてくる。旅について、それは「遠さを味わふ」心だといつたのは三木清であつたが、この松尾芭蕉の夕暮れの藤の花も、三木風にいえば、日常から離れて

漂うはるかな浪漫的心情の中で、優しく人めいた一世界を獲得しているといえるだろう。しかしながら、現代において、旅と人生を重ねて

詠嘆することなどは、もはや陳腐な感慨になつてしまつた。そして、旅はきわめて安易になり、他人まかせになり、その、移動の過程が

もつていた旅の心は、ようやくその本質を失おうとしている。

それはちやうど、われわれの風土がまだゆたかな未知の天地にめぐまれていたはるかな過去、都として開けていた山城や大和の盆地に住んでいても、一生のうちに海を見る機会をもつことなく、人づての語りごとや、詩歌をとおして空想の中で、架空のイメージを育みながらそれでも海の広さや波しぶきの美しさを歌つた歌人たちがいたこと

と、全く逆な現象だといえるだろう。そして、歌枕とは、そうした旅の困難にみちていた時代の、詩的あこがれの中にあつた地であり、

多くの先人の詩歌の重なりの中に育まれた心の旅路なのである。

（馬場あき子「歌枕をたずねて」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

この文章の著者は、幼いころ、父の言いつけを破って、ひどくしかれたことが三度あったという。一度目は、外国人をもの珍しそうにじろじろ見るなどという言いつけを破った時、二度目は、家の人にとわりもなしによその家に行つてはいけないという言いつけを破ったとき、そして、三度目が次の文章である。

もう一度は、大腸カタルを病んだ病み上がり、に、「こりやあ道ちゃん、とつてもわるいんだ。おいしそうに見えるけどね、これを食べるとせつかくよくなったのにさ、またおなか痛くなるよ。道ちゃんは痛くて苦しむし、パパとママは心配して寝られないし。だから食べるんじゃないよ。」

と、かたく言われたその梅の木の木の青いのを、これまた色彩のつややかな美しさにほだされて、つい取って食べたときだ。運わるく、梅の木は、彼が執筆する書斎の真正面に植えられていた。

「パパがかいていらつしやるときは邪魔するんじゃないよ。パパは一生けんめいだからね。」

と母はつねづね言っていたし、実際、一生けんめいに書くときの父がどんなに他のことに對してうわのそらになるかを、私自身、たしかめて知っていたから、梅の実を取るのも見られまいと、たかをくくったのである。

ところが、彼はちゃんと見ていた。今にして思えば、私の計算不足というもので、まっ赤なメルリンスがちらちら動けば、いくら一生けんめい書いていても、視界にはそれが入るはずであつた。

青い小さな球が口の中で、酸っぱいほろにがさをキュツと押し出したそのとたん、ガラリと開いたガラス戸の向こうから、

「ばか！ 何をする！」

雷がおちたかと思われる音声に、私はだらしなく尻餅をついた。

彼はなかなかのスポーツマンで、水泳は教師免許を持っていたし、学生時代は「早稲田を負かした」ピッチャーだった。だから走るのもたいへん速かつた。あつと言うまに、逃げる間もあらばこそ、彼ははだしで飛んで来て、私の口に乱暴に手を突つ込むと青梅の実をひきずり出した。それから茶の間の方をむいて、「ママ！ ママ！」と叫んだ。

「ひまし油！」

ひまし油が、拒もうとする歯と歯の間に流し込まれて、その臭さに吐きそうになつてゐる私は、容赦なくひきずられて、納戸の戸だに押しこめられた。

「あれだけ言つてわからんやつは——座つてろ。」

いつもならひまし油の「お口なおし」のドロップが与えられるはずだった。しかしその日はドロップはいくら待つても来なかつた。ぬるぬると、いくら唾をのんでも舌にまつわつてはなれない油に辟易しながら、私は何となくカビ臭い戸だなの中に座つていた。ネズミ、出て来やしないかしら、お化け、いないかしら……

三度とも、考えてみれば約束違反であつた。

「わかつたね。」

「うん。」

「どう、わかつた？ 言つてごらん。」

そんなやりとりのあとで、約束違反したのだから、まあしかたないと、私はらちもなく悔いながら、しかし不思議にも何かせいせいしたさっぱりとした感じを心のどこかで味わいながら、罰を受けた。

あのせいせいした感じは、いま、分析してみれば、「罪」への正当な「贖い」の機会を与えられた者の味わう一種の安堵感でもあつたろうか。その三度の罰のとき、彼が意外に見せつけた権威はまた、私の幼く漠とした世界に、ひとつのはっきりした線を引いて見せたとも言える。

「ここまで。これから先はまだ。」

その線は、子供心に信頼感を植えた。安心感をも植えた。広がりすぎる自由は不安なものである。渺とはてしない、粹なき世界は自由の世界とは異なる。

「よし、立つてろ。」

その言葉と罰とが私に、自由というもののほんとうの意味を教えたのではなかつたかしらと、今になつて思うときがある。

(犬養道子「白樺派文士としての犬養健」)



「もう海なんてすぐそこさ。フンドシ一つで走って行ける。」
と父は、何度目かの転勤でこれから行く南国の町について語ったことがある。

私は父の口調に照れくささもまじっていると思った。

その転勤は父にはどこか嬉しいかんじのするものだったろう。父は四十を越して脂ののりきった時期であった。家から禪のまま走って行けるといふ譬えが、息子には、どこかで本当と思えなくても、ただの上つ調子の誇張とはかんじられない。まぶしい、自信のようなものが伝わってきて、返事をし兼ねる思いで、
「はだかだ?」
とびっくりした声を上げた。

「おお、かまわんさ。」

父は自分の冗談が通じたように笑った。息子はなんだかちよつぴりかなしくなった。

父はもともと冗談がうまく言えない性質だった。いや家では周りが、とかのふざけた言葉を父の口からきいたことはある。それはひびきがおかしいだけで父のユーモアでもなんでもなかった。ただそういう言葉に父の恬淡さへの努力が見出せた。母の方は関東育ちで父は関西育ちだが育ちがちがうとユーモアも食いちがうらしい。実際相手にされない諧謔ぐらいアホらしくみじめなものはない。私はなにも家族の笑いというのはお互いの人柄を尊重するところからうまれる、とは思っていない。むしろ逆かもしれないし、たいていの場合は、人格尊重にかかわりなく笑いは笑いとして、笑って過ごせるものだ。それがうまく行かないのは単に通じないからなのだ。私は、父にも、妻や子供を笑わせたいと思うことはあっただろうし、それなりの冗談や誇張や、落語の落ちのような会話も結構やりとりしていただろう、と考えるだけだ。

ともかく、禪一つで海まで走って行ける、と言うのも、私を喜ばせようとして言ったもので、それを聞いて嬉しかった。家から裸で海辺に駆け出して行けるのは、私には願ってもない生活だった。一足先に行ってきた父は、その町の生活に、自信をもっている

ようだった。

父は転勤のとき最初なるべく子供の前で口にするのを避けている。子供がたまりかねて、「ねえ、またどこに行くの。」と訊くと、母は仕方なさそうに、「ええ、そうよ、こんどは……よ。」幾らか打ち沈んだ口調で言い、父が「あの荷物を解かなくてよかったじゃあないか。」などと元気づけて言うのに殊更恨めしように肩で息をつく。ぐずぐずすることの好きな母には一年か二年である転勤はとにかく大変だった。引越しのときなど、一種の気力というものに頼っていなければならず、それはもう母の最も苦手とする精神論なのだ。いけないとわかっていても母の受け止め方は、本当にいやいやだった。

(坂上弘「枇杷の季節」)



我々がペンをとって何かを書くということは、言葉を開拓していくということと同じ意味をもつ。この開拓によって自己というものが形成されていくのである。言葉の不自由な性質そのものが言葉を開拓する原動力になるのだ。こうした性格が逆に我々を幾たびも考えさせ、迷わせ、あるいは邂逅をうながすといってもいい。

つまり言葉というものに翻弄される自分自身を見出すということ、読書日記をつける一つの利益なのだ。さまざまな言葉に翻弄されながら、そしてその極限に見出すものは何かといえば、あらゆる種類の言葉を組み合わせてもなお表現することのできない「沈黙」というものだ。これはだれでも日常経験すること、たとえばある本を読んでも非常に感動したとき、あるいは思い惑うたとき、どんな現象が起こるか。まず言葉を失っている自分自身を見出すであろう。心の中であれこれと思いめぐらしてみることが、さて口に出そうとしたり、自分でペンをとって表そうとすると、どう表現していいかわからなくなることがある。たちまち言葉に窮して沈黙せざるをえなくなる。

真の感動は必ずこういう現象を起こすもので、ここに生ずる沈黙状態を私は重視したいのだ。なぜならいま述べたような意味で言葉を失うということは、反面からいうと心の充実を意味するからである。言おうと思っても容易に表現しきれない、そこに人間の心の真実が芽生える。しかもそういう真実ほど人に告げたい、あるいは表現してみたいという欲望を起こさせる。こうした苦しみ、つまり言葉の障害と格闘し、開拓し、この苦闘の中に人間の精神は形成されるのである。自分の言葉をもつということは至難なことだ。我々は自分の言葉だと称しながら、いかにしばしば他人の言葉を使っているか。有り合わせの言葉を用いたり、世間一般の流行語を無批判に使っているが、いまでもなくそれは精神の死である。自分の言葉をもつということは、自分が生まれることだ。むろんそこには固有の体験と、あわせてその体験への正直な思索がなければならぬ。そうして発した自分の言葉は、その人の生命の曙だといつてよい。「生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき

生涯なり。」とは若き島崎藤村の詩集の序文の一節だが、新しい言葉、つまり自分で苦闘して考えぬいた言葉は、その人の生命をひらくのだ。

(亀井勝一郎「読書論」)



「学ンデ時ニ之ヲ習フ」という習の字は、鳥が羽ばたいて飛翔を練習する形を現したものであるということである。私は人間の能力がこの練習ということによって高められ、不可能が可能にされていくことに興味を感じている。人類進歩の道程上において、今日まで無数の不可能が可能にされてきたが、それは一方では発明によってなされ、他方では練習によってなされた。空を飛ぶこと、水をくぐることが、人類あつて以来の願ひであつたろうが、この宿題は、発明によって解決された。他方、無数の事例において、人間は練習錬磨によって、不可能を可能にできたし、また現にしつつある。

寺田寅彦の随筆に、米粒に千字文を書く人の話があつたのを記憶する。それによると、はじめ米粒を指頭にのせて毎日ただながめていく。すると、それがだんだん大きく見え、しまいは鳩の卵ぐらいに見えるてくるという。そのときにいたって、特殊の細い筆で書けば千字書けるというのである。また、天体の観測者が、非常な速さをもつて望遠鏡面を飛過する天体を目でとらえるのは容易ではないが、それが練習によつて、やがてゆつくり見て、カードに記載することもできるようになる、というような話であつた。

われわれはこれに類する錬磨の実例をいたるところで見るが、手近なところで、運動競技の名手の技術には、しばしば驚かされる。先年招かれて学生の剣道道場に行くと、わざわざ模範試合をさせて見せてくれた。選ばれたのは、三段中の精鋭ふたりということであつたが、うち合うこと数合、いかなるわざか、一方の者は竹刀をまき落とされ、瞬間飛びすさつた赤手の剣士は、竹刀を振りかぶつた相手と相対した。かけ声とともにうちおろす。どうひきはすしたか、次の瞬間、ふたりは竹刀を捨てて組み合つていた。三段中の手ききといわれた相手の太刀の下を、どうくぐつたか、文字どおり目にもとまらぬ早わざであつた。そのとき考えたが、かりにわれわれがどんな名刀を振り回したところで、この赤手の若者をきることはできないのである。剣道では昔から、一眼、二足、等となえて、目の錬磨をやかましくいったものときが、目前にその実演を見て驚いた。

しかし、これは剣道には限らない。われわれは見慣れてなんとも思わないが、野球の打者が飛んでくる速球を打つのも、実は驚くべきことである。いわんやとつきに曲がるカーブを、誤りなく打つ等にい たつては、常人から見れば、人間以上のわざともいえるのである。試みに全く野球の心得のない人の前に静かにゴロをころがしてつかませてみるとわかる。たいていの人は、両手で、球の通過したあとの空気をつかむのが常である。もしこれを常人というのなら、打者のうしろにいて、振り回したバットに触れたファールチップを平気でつかむ捕手のごときは、超人といふべきである。

柔道の心得のあるものは、倒れても頭を打たぬ。水泳の心得のあるものは、水に落ちれば、自然に適当に手足を動かして、沈まない。いったい、立ち泳ぎのまき足のごときは、いっけん不自然な足の動かし方をするのであるが、練習したものは、なんの苦もなく、無意識のうちにそれをする。およそ水に落とせば必ずおぼれて死ぬ人に比較すれば、落ちても沈まない人間は、別種の動物といつてもさしつかえないほど、すぐれたものであるわけだが、人は練習によつてそれになることができる。

（小泉信三「平生の心がけ」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

テレビやラジオにいわゆる教養番組が多くなった。また、日本や諸外国の文物風土を紹介し、現状を分析批判するような現地報告の番組も多くなった。それらはそれぞれにおもしろい。おもしろい以上に、ときにわれわれに疑問を投げかけてくる。ところで残念ながら電波ジャーナリズムというものは、疑問を自分で考えてみたいから、一寸待つてくれ、といったも待つてくれない。電波の機械的なテンポをもってさつさと歩み去つてしまふ。われわれは考えることはやめて、眼や耳でついてゆかなければ前後の脈絡を失つてしまふ。

十五分か三十分の番組が終わると、とつさにとんでもないコマーシャルが聞こえてきたり、何の関係もない音楽になったりしては白菜、トマトの百グラム当たりの今日の値段になったり、美容体操になつたりする。見るともなく、聞くともなくそれらを見、聞きしているうちに、さきに疑問に思い、考えてみたいと思つたことも、どこかに消えて、あとかたもなくなつてしまふ。

このことの人間に及ぼす影響はかなり大きい。現代において、人間の生活、生涯が断片化し、瞬間化し、昨日と今日、今年と来年との間の精神のつながりが稀薄になつたことが言われている。これにはいろいろな原因がある。たとえば仕事が多分業化し、専門化し、機械化して、人間の経験、過去の蓄積を不用にするという傾向が強まつてきているということもその原因のひとつである。さらにいえば、その人の個性を必要としないのみか、反つて個性を邪魔者とするような職場、仕事が多くなつてきた。機械の番人、また追隨者になることが要求せられる、ということもある。経験も個性もいらぬということでは、人間から誰々でなければならぬということと奪い、アノニムな存在、即ち誰でもかまわない誰かですむということである。そういうことを長年にわたつてやっておれば、人間の断片化は当然に起こつてくるだろう。

精巧な機械や自動機械が多くなれば、人間の労働時間を少なくしても、生産を増加することができるだろう。生産の合理化は、今日ではそういう方向ですめられている。一日の労働時間が六時間になり、週五日制になるということも起こつてくるだろう。当然に閑、休暇が多くなる。さてそのできた閑な時間をラジオやテレビを

聞き、見ることにあてるとすれば、それらは既にいったような性格のものだから、前後の持続しない断片化に拍車をかけるという結果になる。

右のことは、現代という時代の必然的な傾向だから、ある意味ではやむをえないことであるが、さてそれでいいのかと考えるとそれはそれで困るのである。やむをえないとしても、いいとはいえないのである。ここに問題がある。

人間が断片化し、瞬間瞬間に生存する存在に化するということは、自己自身に対して責任を負わなくなることである。また自分自身の一生、生涯というものをもち、年毎に深まる年輪をもちないということである。夫婦、親子、師弟、友人の間柄が、そのときどきの都合による結びつきとなつて、持続する愛情も尊敬もなくなるといふことである。これは人間にして人間らしくない生き方、非人間だと私は思う。過去を負いながら未来を思い、現在において現在を超えたもの、即ち人生や自分の存在の意味を思い、その意味を認知することによるこびを感じ、また現在の自己に不満を感じるといふことが、人間を他の動物から区別している特質である。

(唐木順三「詩とデカダンス」)



読解問題 7月4週分

問1 読解マラソン集1番「日本は、ご存知のように、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の気候は、寒帯にも熱帯にも属している
B 熱帯の植物である竹に雪が積もる様は、日本の状況をよく表している
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「日本は、ご存知のように、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の自然や風土は、芸術や文化との調和の中から生まれた
B 日本は、大陸から入ってきた文化を日本的に加工して受け入れた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「渡り鳥は、果たして」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 渡り鳥は、渡りの季節になると、だれに教えられなくても渡りに旅立とうとする
B 渡りの季節が終わると、自然に渡りの興奮はおさまる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「渡り鳥は、果たして」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 渡りの方向は、ある程度遺伝的に決まっているようだ
B 同種の仲間の飛び方より、遺伝で決まっている方向の方が優先される
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「ウサギの耳は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ウサギは、フルスピードで走るときは耳を後ろに倒す
B ウサギは、長い大きい耳に風を当てることによって汗を発散する
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「ウサギの耳は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ウサギの耳の表面積は、動物の中で最も大きい
B ウサギの祖先はモグラのようなものだったので、進化したウサギほど地下に巣を作る
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「杉野君は、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 近江呉服店の主人は、杉野君のことをよく知っていた
B G町の人々は、田舎の人らしくだれも話し好きだった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「杉野君は、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A お茶を持ってきた少女は、この店の主人の子供だった
B 杉野君は、近江呉服店に入る前までは心細かった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 8月4週分

問1 読解マラソン集5番「あの荒地へ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昌治は、小三郎を供につれて領内を見て回っていた
B 小三郎は、見回りが、雨風にかかわらず休まず続けられることに負担を感じ始めていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「あの荒地へ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昌治は、見回りに、最初は小三郎以外のものもつれていった
B 昌治は、小三郎が独自に領内を調べていることを知っていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「君たちの船は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 君たちの船は、生まれ故郷の岩内に向かっていた
B 漁夫たちは、烽火が見え始めると、歓声を上げて漕ぎ出した
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「君たちの船は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 君は、ふりかえって父の目に気がつく、親しみをこめて声をかけた
B 助かったと思ったあと、君は気を失った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「歌枕——、それは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 歌枕の名所が現代ではあこがれの地でなくなったのは、海外旅行が普及したためである
B 現代の「旅行」に「旅」の味わいがなくなったのは、大勢で行くようになったからである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「歌枕——、それは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「遠さを味わふ」心とは、遠くまで旅をするほど価値があるという心情である
B 歌枕の名所は、多くの人を訪れることによって更に豊かなイメージを獲得した
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「この文章の著者は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私は、梅の実の青いのを食べてはいけないと言われていた
B 私は、父が見ていないのを見はからって、梅の実を取った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「この文章の著者は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 父のしかる基準がはっきりしているので、私は安心感を持った
B 私は、罰としてひまし油を飲まされた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 9月4週分

問1 読解マラソン集9番「もう海なんて」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「フンドシーつで走って行ける」というのは、気候が温暖だという譬えである

B 父は関西風の冗談が得意で、家族をよく笑わせた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「もう海なんて」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 母は、頻繁にある父の転勤に伴う引越しを嫌がっていた

B 家族の中での笑いは、お互いの人格を尊重する中から生まれる

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「我々がペンを」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 読書日記をつけていると、言葉に翻弄された極限に、表現できない沈黙を経験する

B 言葉を失うような感動は、心の充実を意味している

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「我々がペンを」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 表現しきれないものを表現しようとするときに、相手への思いやりが生まれる

B 自分の言葉を持つということは、自分の人生を生きるということだ

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「学ンデ時ニ之ヲ習フ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 不可能を可能にするものの一つは発明、もう一つは練習である

B 練習によって不可能を可能にするような例は、世の中では滅多に見ることができない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「学ンデ時ニ之ヲ習フ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 特に優れた能力には、練習以外の才能も必要だ

B 空を飛ぶこと、水をくぐることも、練習によって可能になる

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「テレビやラジオに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A テレビやラジオは、電波の機械的なテンポで放送するのではなく、現状を分析批判するような番組を増やすべきだ

B 人間の生活が断片化した原因の一つは、仕事が経験や蓄積を必要としなくなったことである

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「テレビやラジオに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 人間の労働時間を少なくし、余暇や休暇を増やせば、生活の断片化は少なくなる

B 瞬間瞬間を精一杯に生きることが人間らしい生き方である

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×